

## 全体討論 パネル・ディスカッションの後に

前「近現代社会と古典」班代表 中川 久定

最後に私から今日の全体の話をもとめるようにと、中谷代表からその話を聞きましたのが昨日の午後であります。そのときに非常に困惑いたしました。その困惑の理由と申しますのは、あの有名な宗教学者のルーマニア生まれのミルチャ・エリアーデが、シカゴ大学の教授として亡くなったときに、ルーマニアの彼の若いときからの友人が、こういうことを申しております。「エリアーデは、比較宗教学者として様々な世界の宗教について発言してきたけれど、彼自身がどのような特定の宗教を信じているのかという confession を彼はしたことがなかった。私はそれを聞いたことがなかった。一つの宗教に完全に自分の信仰の在り場所を求めない人間に、世界中の宗教について語るができるのであろうか」。という厳しい批判をしたわけであり、私が昨日感じた困惑と申しますのは、一つはその点にかかっております。私は18世紀のフランスのことを勉強してきた人間でありまして、古典学者ではありません。したがって、古典学者であるならば、世界中のどの古典を研究していた場合でも、他の領域の古典において問題になっていることがどういうことであるかということが、身をもってわかるであろうと私は思っております。にもかかわらず、私はそういう一つの古典学に身を入れて研究したことがございません。ですから、私がこの場でこのまとめの発言をするということができるとは、全然思っておりません。ですから私は今日は、私がノン・スペシャリストとして感じたことを少しここで申し述べさせていただきます。

今、私はそういうことが私にはできないと言いながら、ノン・スペシャリストでありながら、発言をすると申し上げました。そのことについて一言、言い訳を申し上げますと、私はさきほど18世紀のことを研究していると申しましたが、私が最初に研究の出発点にいたしましたのは、デイドロとダランベールが編集いたしましたフランスの『百科全書』でございます。この

フランスの『百科全書』を編集いたしましたデイドロが死ぬ最期の時になって、こういうことを言いました。「私は生涯をかけてやりたいと思っていたことがあった。しかし、次から次へと私に、あれをやれこれをやれということを言うてくる人がいて、しかもそれをおめおめと引き受けてしまったために、ついに自分は一生の間、スペシャリストになることができなかった。それなら自分はいったい何であろうか。私は今、自分がパッサーブラ (passable) なモラリストと、つまり、まあまあな (passable) モラリストというふうに、人が私を呼んでくれるならば、それで満足するであろう」と言っております。私は今日発言すると申しますのは、昨日は、今日は家にいて今日の会には出ないで、自分のやるべきことをやろうと思っていたのですが、また昨日、頼まれてしまいまして、今日も一日ここにいることになって、その結果ここに立っているわけであり、ですから、今日私が申し上げますのは、とてもデイドロほどの才能はございませんけれども、パッサーブラなモラリストとして、はたしてパッサーブラとして評価していただけるかどうかわかりませんが、感じたところを述べさせていただきます。

『百科全書』のことを申しあげましたが、『百科全書』のなかに、「クラシック (classique)」という言葉が出ておりまして、先ほど東京大学の月村教授が微細にわたっておっしゃいましたようなことがほぼその通りに出ております。そのなかで少し補足して申し上げますと、クラシックという言葉が形容詞として出ていて、これはリセで 사용되는教科書であって、そのなかに含まれるような作家をさして、クラシックな作家という。そこであげているのは、ホメロスとかウェルギリウスであります。その時に、クラシックな作家であるべき人間というのは、必ず満たすべき要件がある。それは、卑俗な言葉で書いてはいけない。その人が書いている文体がすぐれた文体であるということ

を必要条件とする、ということが言われております。そのことからわかるわけでありまして、さきほど東京大学の市川助教授がおっしゃったことに関係するわけでありまして、市川助教授は、クラシックというのは社会におけるコンセンスを形成する、というふうにおっしゃいました。私はその言葉を別の点で言えば、ある社会における一つの凝集力の結節点になるものというふうに定義できると思います。古典的な作品と社会との関係を比べてみますと、リセにおいてクラシックな作家を読んだ人たちというのは、18世紀のフランス社会の上流階級のなかに属していて、その人たちが将来のフランス社会を担っていくという自覚を持っておりました。自分たちがクラシックを通して社会の凝集力の結節点になるということを考えていたわけでありまして。その時に、結節点になりえたものは、これは学識であります。

ところが一方、そのことが古典の基底になるわけですが、さきほど中谷代表がカノンと古典とをここでは同じレベルで扱わなければならない場合も生ずるから、厳密には分けることができないと、そういう立場でわれわれの研究は出発しているということをおっしゃいました。そういう点から言いますと、私は18世紀のカトリック護教論を勉強しておりますが、その当時に、カトリックの護教論者たちが非常に強調いたしましたのは、自分たちは理神論者たち deist とも違うし、プロテスタントとも違う。deist とかプロテスタントというのは、自分たちが理性の検討によって、さまざまな問題を、聖書のなかから引き出してきて読むというふうに考えている。しかし、そういう検討ができるというのは、限られた人間のことであって、一般の大衆はそういうことができない。一般の大衆が必要としているものは、理性による検討ではなくて、信仰である。すべての階層の人の、無知の人も含めて、すべての人の信仰を受け容れることができるのがカトリック教会であると、そういうふうにおっしゃいます。ですから、そこではっきりと分かれておりますように、カノンというのは、その社会全体を含むような凝集力になりうるけども、古典というのはある一部の学識ある人たちの凝集力の結節点になるのではないかと考えられます。その点で社会との関係において作品を見た場合に、カノンと古典というのは区別できるのではないかと考えられます。

今、社会の結節点というふうに、ひとつの社会のなかでの古典の働きということを考えてみました。しかし、もしそれが外に出ていった場合にどういうふうになるか。外に出ていった場合に、それを受け取る社会が、外の文明が一つの別の文明とそこで衝突するとき

に、それをうまく緩衝装置を用いて受け容れることを試みる場合があります。たとえば日本が、最初にキリスト教を受け容れたとき、16世紀にイエズス会士がポルトガル人を率いて日本にやってきたときに、はじめに「デウス」というのが何であるかということがわからなかったため、最初はフランシスコ・ザビエルもデウスというのを「大日如来」というふうに訳しました。そのためにその当時の日本人は、キリスト教というのは仏教の新しい派であると考えて、これを容易に受容して大勢の人がキリスト教化したわけでありまして。しかし、後になってザビエルはそれが誤りであると悟って、それからは大日如来という言葉を使うことを避けて、その代わりにデウスという平仮名書きに書き、書くときにはただ単にDというふうに大文字で書く習慣が日本に定着いたしました。そういうふうにある緩衝装置を備えて受け容れられるような場合には、あるひずみを伴ってではあっても、一部分はなかに入ってくると思います。その最も逆にあるのは、さきほど丘山先生が指摘されたように、中国が仏教を受け容れたときに、この現実からこの苦の世界を去ってマヤーの世界を去って魂が外に出ていくと、そのときの自由と解放を求めるようなインド的な考え方が基礎にある仏教が、中国に入ったときに、現世享乐的なものとは完全に一体化されてしまっていて、本来仏教がもっていた価値観というのが転倒してしまっただけではないかということをおっしゃいました。そういう場合がおおいにあると思います。

これを私が自分の身近なことで申しますと、フランスの18世紀にジャン・ジャック・ルソーが『社会契約論』という作品を書きました。これは民主主義の原点というふうにおっしゃられているものでありますけれども、それが最初に日本に入ったときに、中江兆民が漢訳いたします。これはきわめてすぐれた作品であって、それは中国でもそのまま使われたような作品でありますけれども、そのなかで中江兆民があれだけ日本語がよくできて、その後、岩波文庫に入っているもののなかでも誤訳されているようなところがすべて正しく訳されておりますけれども、それほど正しい翻訳でありながら、中江兆民は一カ所、わけのわからないことをしている。「契約」と申しますのは、あらゆる場合にAとBと二人の人間がいた場合に、AがBに対して何かを与える、それに対してBがAに対してその対価となるものを与え返すという構造になっております。ルソーはそういうふうにご規定しているのですが、にもかかわらず、中江兆民の場合はそうになっておりません。Aがすべてを相手に与える。そのとたんに契約が成立してしまっ

ているわけです。Bの方からお返しをもらわないという構造になっている。なぜそういうことになったのか。それは中江兆民自身が書いておりませんのでわかりませんが、一つ考えられるのは、その前に彼が『国会論』というもののなかで、紳士たる者は相手に対して何か行為をしたときにお返しを求めるべきものではないということを書いている。当然、お返しは返ってくるということが予定されているわけです。そういう予定調和的な考え方に立って、その部分を、向こうから契約に対する対価が返ってくるということを翻訳しないでもそれが自明であるというふうに考えたのかもしれない。そういうふうに考えてみますと、一つの文化が他の文化に翻訳されるときに、根本的に価値が違ってうつされるといえることがありうると思います。その間には、なお解くべき多くの翻訳上の問題がたくさん出てくるとは思いますけども、しかし、文明と文明との間に、相手に対して一つの文化を、古典を送り出し、それを受容するときには、今、言いましたような一部を変更して受け容れる場合、全面的に価値の転倒が起こる場合、その間にさまざまな変容がありうると思います。そのことが大きな問題だと思えます。

そういう古典が、現実の世界のなかでどういう状況のなかにあるかということが、今回のシンポジウムの大きなテーマでありましたけれども、最後にヤフェット教授が言われたように、「現代は危機のなかにある。しかし、その危機はやがて乗り越えられるだろう」という力強い言葉をおっしゃいました。その危機というのは現代の状況のなかでは、一つは商業主義的な経済的効用というのを求めるということにあると思います。つまり、古典を読むということが、どういう意味があるのかということ。現に、私は理学部の親しい友人から聞いたのでありますけども、理学部の学生には古典を読むということは非常にマイナスの価値になっている。つまり、古びたものを読んでいる暇はないということで、ただ新しい雑誌論文しか読まないという状況になっているということでもあります。科学者ですらそうでありますから、今の社会のなかでは、よく文部省がこれだけのお金を出してくれたと、これも奇跡としか考えられないようなことが起こっているわけであり。しかし、こういう状況が続くかという保証はまったくありません。

それからもう一つ、科学技術の進歩についての問題でありますけれども、今、17歳の高校生からの発言で、「科学がすべてを解決するであろう」と言われましたけれども、その発言は昨日、その人が言われた発言とやや矛盾する点を含んでいると思えますけれども、そ

のことは別にして、科学というのは価値について中立的でありますから、現在のように価値の問題が非常に混乱し、価値の問題において人間がその存在意義を問われているようなときに、科学自体はそれに答える力を持っていないと思います。

もう少し、具体的な例をあげてみますと、現在日本では宇宙開発事業団、アメリカではNASAが中心になり、ヨーロッパではESAと呼ばれているヨーロッパの宇宙機関の連合体があります。それが共同の事業として、今 International Space Station というのを上げております。これはやがて2年半かけて火星に行くということを念頭におきながら進められております。そのなかでは何が起こるかとおっしゃいますと、これは完全な無重力状態に近くなっております。微少重力状態というふうに言っていますけれど、その微少重力状態のときになると、物を投げてもその物は漂っています。下に降りることはできません。それで現代の哲学の大きな中心的課題として、人間の被投性という、この地上に投げられているという観念があります。それからまた人間が何か物を企投するという、物を投げることによって計画をたてるというイメージが出てきておりますけども、しかし、そういう観念はこの International Space Station のなかでは、出てくる余地をもちえないような状態になっております。そういう状態が、われわれを近い将来において経験するような状態が、そのなかですでに現れているわけであり。これは一つの例でありますけども、自然科学の発達によって、今までわれわれが経験することができなかったような環境状況がそこに生まれてくる。それによって、ものの観念が変わって来るであろうというわけであり。

そのことをもう少し具体的に申し上げますと、人類は青銅器時代に入ったときに axis mundi という、「世界軸」というイメージが出てまいります。これは具体的には木の形をなしたり、山の形をなしたり、あるいはヒンズー教のヨーギー（ヨーガ行者）が座っているときに、下に平らなものがあり、まっすぐ背筋を立てるといって、そういう山の形という、つまり、横と縦とで形成されるようなものです。そういうものが宇宙ステーションのなかでは、もうなくなっている。ただ、漂っているだけ。そういうふうになったときに、人類はわれわれが毎日安全に暮らしているような保証を失うわけであり。そういう状況になってくる。そういうところで人類が新しい環境に直面した危機というのも当然現れております。こういうすべの面から、現在われわれがどこに生きていくかという危機に陥っている。

それならどうすればいいか。われわれとしては、人類の自己認識である古典に頼らざるをえない。つまり、人類がそれぞれの文化圏において自己を認識したものが結集した古典の総体に今、頼るよりしか仕方がないと思います。それで古典の総体に頼ってどうするのか。これは昨日、中谷代表がプラトンのイデア説とスッタニパータというインドの教典とを比べられました。そのなかに類似な点とそうでない点があると。そのことに関して昨日17歳の少年が質問されたところでは、自分が高校で習ったところでは、仏教とイスラム教とキリスト教というのが世界の三大宗教と言われていると。それを一つにまとめることができるのかという質問がありました。それに対してテイクシドール先生は、それは可能かもしれない、しかし、今は自分は確定したことは言うことはできないと言われました。こういう古典の間の対話というのは、本来、この「古典学の再構築」の研究会が発足したときに、中谷代表が「一般古典学」というのを作りたいと言っておられました、その一般古典学への方向を示していると思います。こういう人類の英知が将来、一つの形になっていくということを、地球上の人類の存続を考えるとときに、古典に頼って、古典の総体の中の対話ということをはからなければ、われわれにとってすべては危うい。ただそれに頼るしか仕方がない。そして先ほどのヤフェット教授の力強い言葉を借りれば、「そして、人類はそれだけの力をもっているということを確認する」というふうにおっしゃいました。私もそのことを確信して、この長く続いた討論のまとめと言うにはあまりにも粗雑なまとめを終わらせていただきます。どうもありがとうございます。